

UIFA JAPON NEWSLETTER

■主な内容

2000 年度 UIFA JAPON 通常総会記念講演

吉村行雄さん

「北欧の近代建築」に魅せられた一日

連続企画 広がるレースワーク 8

「インド・自然との調和をめざす建築」

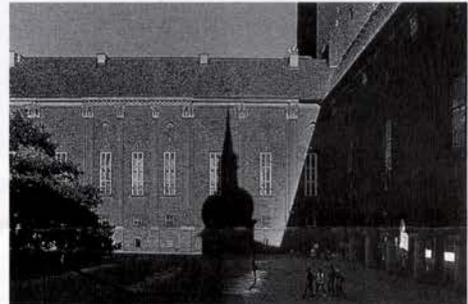
「モンゴル国への旅」

この指とまれ「埼玉県立大学見学記」

特別企画「ユニバーサルデザインを考える」

ド・ラ・トゥールさんを訪ねて

役員会報告



■2000 年度 UIFA JAPON 通常総会記念講演

吉村行雄さん

「北欧の近代建築」に魅せられた一日

宮本伸子



本年度の記念講演は、「北欧の近代建築」という、日本人で建築を志す人なら魅了されてやまないテーマを、これまた、その魅力に捕り憑かれて(失礼ながら、こういう字を当てさせて頂きたい)、永らく魅惑的な写真を撮りつづけて

こられた吉村氏を講師に招くという、秀逸なる企画であったと思う。

自分自身が学生時代から北欧建築が大好きで、6年ほど前にストックホルム市庁舎を訪れたこともあるので、一層興味深く見せて、聞かせていただいた。当日は、素敵な写真をふんだんに見ながら、それぞれの建物の秘密の解き明かしあり、北欧建築に共通の要素の解説ありで、時が経つのを忘れてしまった。

まず最初はスウェーデンからで、ストックホルム市庁舎(ラグナル・エストベリ)。様々な様式の組合せ、一つとして同じ形の無い尖塔、丸柱の柱列と思い込んでいると多角形柱があり、そこに彫刻まである。絞り込まれたエントランスと広々としたブルーホール、黄金の間の時々刻々に動く光によって異なる表情、いずれの写真もが語る、この名建築の妙味に酔いしれる一時であった。

次は G. アスプルンドの一連の作品で、ストックホルム市立図書館、シネマ・スカンディア、森の葬儀場、イエティボリ裁判所(増築)。シネマ・スカンディアのような地下となる空間もアスプルンドの手にかかると、非日常の空間として居心地の良いものにしつらえられている。森の葬儀場はあまりに有名だが、吉村氏はさらに水面に映る姿、葬儀を終えて出てくる人々の後姿などから、この建物と周囲の自然が呼応している様子を写真という媒体を通して語り掛けておられるようだ。



ストックホルム市庁舎(上下)
撮影: 吉村行雄さん

場面をデンマークに移して、A.ヤコブセンのオーフス市庁舎、ルードブレ市庁舎。前者では吉村氏と一緒に時計、階段などの秘密探しの旅に出たように楽しみ、後者でも、ベンチ、照明、モスグリーンの色調など、北欧のデザインとは何かを考えつつ、その人間味あるひとつひとつのマチエールに込められた、熱い作家の情熱が伝わってくる臨場感を味わった。

ヤンセン・クリントのグルントヴィ記念教会まで見て、それぞれの作家の個性がありながら、どことなく共通するものを感じつつ、「作品にふれたことが設計にどのように活かされるか」「大空間の熱や音の問題」といった様々な質問が飛び交う中、あっという間に終わりの時間となってしまった。最後に懇親会では、ハノーバーの万博の最新情報まで披露され、満ち足りた講演会であった。

インド・自然との調和をめざす建築

ナミタ・シン (インド)
(Namita SIHGH)



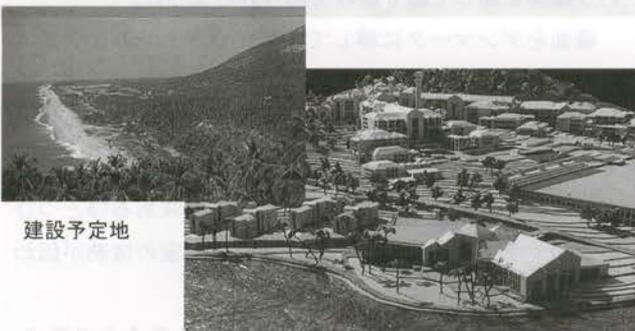
1996年のハンガリー大会では、建築遺産が多く残る地域での新築・増築の仕事を通し、伝統建築の模倣にとどまらない、現代の要望や技術との調和を考慮して計画した学校建築プロジェクトを発表した。シャンディガール在住・建築家。

インドで活発な設計活動をされているナミタ・シンさんからの近況報告です。

インド海軍兵学校 (Ezhimala, Kerala, India)

インドの海軍兵学校の建築は、1988年から89年にかけて行われた国レベルでの2段階方式設計競技によって選ばれた。施主はインド海軍、予算は約300億Rs、敷地はアラビア海に面して6kmの海岸線をもつ約40万㎡の土地である。そこに1,500人の士官候補生を訓練するための施設および寮をたてるプロジェクトで、その兵学校の周囲に、管理・教育・居住・レクリエーションのための施設が補完されることになっている。そのデザイン意図は、美しい自然の海岸線を保護するという目的に端を発している。

軍事のための組織である兵学校は、秩序的で儀礼にふさわしい環境を必要とするが、デザインの試みとしては手を加えない自然そのものと、フレームワークとしての軍隊秩序の両者を同時に認識できるような経験を創造することだった。着工は2000年末の予定で、マスタープランと各施設のコンセプト・デザインが完成しており、現在、詳細図を作成している。



建設予定地

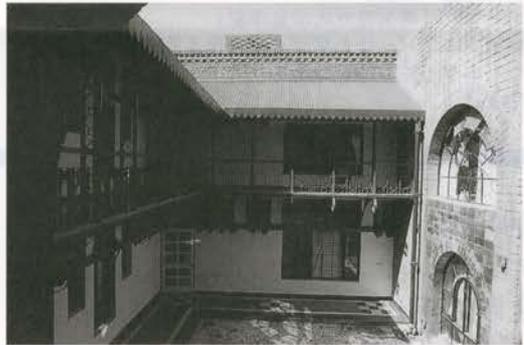
兵学校の模型写真

ウェルハム女子高校 (Dehradun, India)

この高校はインドで初めての公立女学校の1つとして計画された。現存するキャンパスがかかえていた計画性の欠如による多くの組織的な問題を解決し、学校を再組織し、活性化することが目的だった。キャンパスの拡大に伴って、物理的なインフラとしての空間の明快性、そして視覚的に繋がった



ウェルハム女子高校ホステルの外観



傾斜屋根をもつ中庭

開放的な空間や、全体的な秩序感が必要とされていた。この学校の建築計画については、プタペストでのUIFA大会の時にスライドを映したので、ご記憶に残っているかもしれない。

今年、そのウェルハム女学校のホステルが2棟完成した。この2棟を創るときに苦労したのは、敷地がヒマラヤの裾野に位置していることから、「丘の建築」にしようと思い、既存の建物に合わせ傾斜屋根を用いたことだった。ここ数年、傾斜屋根の住宅がユニバーサルな魅力をもっているようだが、私達にとっては初めてのデザインだった。

キャンパスに隣接した敷地に建つ女子学生用ホステルは、既存建物と視覚的に繋がっていないので、より家庭的なスケール感を得るために傾斜屋根を採用できるのではないかと思ったのだ。しかし、屋根をタイルやシート仕上げのコンクリートにするのは、贗物のようであらわれた。そこで、2階建てのコンクリート構造の建物にフラットなコンクリートの屋根をつけ、装飾的な鉄骨のブラケットと柱でバルコニーを突き出すように取り付け、傾斜屋根をのせた。1階の石壁や2階の煉瓦壁の水平線と、バルコニー部分が女学生のための居住スケールを作り出している。プロジェクト全体としては、1997年に1,825㎡の科学棟が完成、1998年に1,370㎡の講堂が完成、1999年に3,932㎡のホステル2棟が完成している。 (抄訳 田中厚子)

モンゴル国への旅

田中美恵子

「お帰りなさい」との挨拶

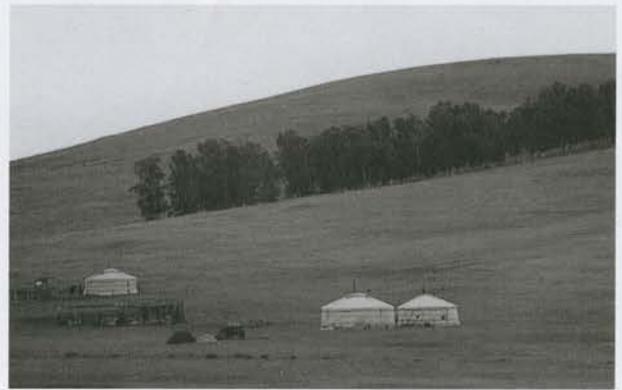
「草原の国」モンゴルに1週間の旅をした。WAC(社団法人長寿社会文化協会)主催の視察研修旅行である。6月24日14時に関西空港を飛び立ち、約3時間半で首都のウランバートル空港に到着。真夏のギラギラ照りつける太陽と褐色の大地に迎えられる。空港からホテルまでの20分程の大部分は、延々と緑の少ない大地の向こうにラクダの背の様な丘陵が続くなかに所々に放牧されている小型の牛・馬・羊がみえるだけで、人影もまばらな静寂の世界が広がっていた。前々からゲルは住居の原点の一つであり、プレハブの原型としても興味があり、一度、実際の生活を体験したいと思っていた。同時に、ツアーの目的である遊牧民のリハビリセンターその他の社会福祉施設の視察もまた、興味があった。

モンゴル国は、日本の4倍の国土に人口約240万人。その中の約65~67万人が首都のウランバートルに生活している。我々にはチンギス・ハーン、フビライなど攻撃的な為政者の国のイメージが強く、必ずしも親しみはなかったが、同じ蒙古斑のルーツとしてモンゴルの人たちは、日本に親しみを感じている表現として我々に「お帰りなさい」と挨拶してくれる。事実、ガイドをして下さった女子大生達も街角で見かける様な日本人そっくりの顔形で、とても異国人とは思えない。1921年に独立立憲君主国になったが、1991年ソビエト連邦の崩壊までは実質ソビエトの政権下にあった。今回表敬訪問した厚生省社会福祉保険局長によると、税金では賄いきれない年金・その他の補助は国外からの援助に負うところが大きい。はっきり言って、旧ソ連の支配下の方が生活は楽であったとの印象を受けた。1989年以降我が国の援助も多く、特に海部総理の訪問以後小淵総理まで経済援助は手厚い。

カラコルムまでの悠久の時

ウランバートルには、旧ソ連時代の置きみやげの高層の集合住宅が建ち並ぶが、地域によってはその間近にゲルが密集する。聞くところでは、都市に馴染めない高齢者が都市住居を嫌ってゲルを造って移住する例が引き起こす現象であるとのこと。現在、それらのスラムクリアランスが進められている様子が見受けられる。

折しも、オリアンガルと呼ばれるポプラに似た木の綿のような種子が浮遊する市街を走ると、トーラ川に橋に平行して直径1メートル程のパイプが延々と敷設されている。その周辺を賄う地域暖房のスチーム管だそう。



大草原に点在するゲル ならかな丘が延々と続く



首都から約2時間のセルゲレン村のタヒルト・リハビリセンターの開所パーティに参加。旧ソ連時代の労働組合の建物を一番ヶ瀬先生の個人寄付で改修。今年度はWACとソニーの献金その他で運営される。草原での事故は意外に多く、草原のサテライト施設としてこれが第1号。正装のセンター長ご夫妻の出迎えを受ける。

一行の中の高齢者3人は乗馬でのトレッキングをキャンセルして、古都のカラコルムを訪れた。ウランバートルから車で6時間の国道の大部分は、舌を噛みそうな凸凹道。しかし、両側に展開されるパノラマは、見渡す限りの大草原の彼方に、色々な形の丘陵が煙るように連なる。その中に放牧された家畜の群・群・群。緑に点在する真っ白なゲルが彩りを添える。まさに悠久の時間と空間の中に放り出されたように、仕事のこともすべて忘れさせてくれる世界であった。

カラコルムはモンゴル帝国の第2代皇帝が12世紀に建設した都市国家で、城壁内に数十棟の寺院があったようであるが、遷都の後には大部分が破壊され埋もれていたが、ソ連の発掘団により発見された。現在は城壁などは修復されている。城外にある愛嬌のある亀石の亀の表情に、最近発掘された奈良の遺跡が思い出された。

ゴビ砂漠でのキャンプ

その日はゴビ砂漠の中のキャンプで1泊した。念願の



①たまたまりハビリテーションセンターの横で小さいゲルの組み立てが始まった。まず、床板を大地に敷く。これを定規に組み立てる。



④組み立て中のゲルの遠景



②ゲルの中央に「ハガナ」と呼ばれる柱を立てる。真南に入り口の位置を設定する。柳の枝を編んだ「ハナ」と呼ばれる壁を床板にあわせて広げる。扉の西側から右回りに組み立てるしきたりらしい。これの広げ方によってゲルの天井の高さが決まる。



⑤屋根のフェルトを被せる。現在はこの屋根をビニールシートで覆う。「ハガナ」のトッライトは夜の草原の道しるべとなる。



③柳の枝でできた垂木にあたる「オニ」を、「ハガナ」に刻まれた仕口に挿し込み、一方を「ハナ」に羊などの毛を編んだ紐で括りつける。我々も手伝った？ が、なかなか難しい。

★こぼればなし

首都から約1時間の丘陵地に建設中の馬乳センターを見学したが、搾りたての馬乳も馬乳酒も伝統医療の一環であると伺った。『モンゴロ秘書』には傷を負ったチンギス・ハーンも馬乳を飲まされた記録があるとのこと。

ゲルでの1夜である。7時過ぎ、大きな真っ赤な太陽が地平線に沈み、長い1日が終わりを告げる。ゲルは直径5メートル程度の大きさであったが、中はゆったりとし、4台のベットと5～6人はゆっくりと集えるテーブル・椅子が用意されている。夜は温度が下がるので、薪ストーブを景気よく燃す。意外に清潔である。満天の星空の真上に北斗七星が大きく輝いていた。

遊牧民の生活は天候に支配される部分が多く、特に今年の厳寒による災害は過酷を極めた。また、地方によってはこの夏(6月は夏期)は雨が少なく、家畜への影響が懸念される。ところで、地面に降り立つと何とも言えない良い匂いがする。草原の草の大部分は良い香りのハーブであった。5センチに満たない小さな植物を動物達は一日中食べている。どおりでと納得する。マトンなど臭いとの先入観があったが、美味しさの正体を見た嬉しさを味わう。埋没資源を豊富に持ちながら(あまたの鉱物資源が眠っている)近代化が遅れている国ではあるが、そのことが21世紀には貴重ではないだろうか。

この指とまれ
埼玉県立大学見学記

山本理顕設計工場設計室長田邊孝浩氏のご案内で、7月4日（火）17名の参加者と共に、この指とまれの企画「埼玉県立大学・同短期大学部の見学会」が行われた。埼玉県立大学・同短期大学部は、看護や医療の専門技術者の育成を目指し平成11年4月に越谷市に開校された。「保健・医療・福祉の連携と統合化」という教育基本理念を受け、公開コンペ時、設計者山本理顕は「看護と福祉にかかわる人たちが、これからの地域の中心になって行かなくてはならないはずなら、学科も従来の分棟配置をやめて、日常の地域社会に入っていくときのネットワークと同じに、看護や社会福祉などの学科が相互に関わり合うプランにすべき」という提案を行った。中央共通施設棟と、平行配置された大学棟・短大棟の一階に、実習室・ゼミ室等が透明ガラスで透けながら街路のように配置されている。ガラスを通して各機能が有機的に繋がっていき、「医療と福祉のカリキュラムを共同で学ぶ空間」という、さきの教育基本理念をうけた設計者の意図が具現化されている。PCaを用いた徹底した構法のシステム化、4層吹抜けの透明建築の夏冬それぞれの環境調整システム、建築化されたアートワークや家具、外周の田圃に連続していくかのような2階屋上の芝生と、象徴的に配される二本ずつの桂の木など、清々しい建築の見学会だった。今回参加した年代の違う3人の方々（40代：寺尾信子、30代：吉本行臣、20代：田代裕子）にご感想をお寄せいただいた。（井出幸子）

世代ごとの感想

寺尾信子

寺尾：建築文化 No.633 を見て、かねてから見学したいと思っていた。実物に接してまさしく、これは建物というより「インフラ」だと感じた。1995年3月にコンペの要項が出てから1999年1月の竣工まで、山本氏の発想→コンペの審査→大規模コラボレーションによる建物の完成までの経緯に非常に興味が湧いた。最初はこれほどシステマティックではなかったに違いない種々の事柄が、竹を割ったような歯切れのよいシステムにのっけていると感じた。そのシャープさは大好きな種類のものではあるが、ひとたび「大学」という性格の建物であることを考えると、娘の通学している緑そのものの大学が懐かしくなった。人工環境がうまくいっているだけに、それに頼る部分が過大では？と。講堂と緑のスロープとの間の、溜りとなるべき広場のペイブメントは「ひと」には厳し過ぎる。20年、30年と年を経るに従い重ねられてゆく余地のある「ルーズな屋外環境」を求めたくなかったのは私だけだろうか。

吉本：見学前に見ていた雑誌に書かれた設計者の説明によると、この敷地において分棟配置によるオーソドックスな計画にすると5～6階の建物群で構成されたものとなり、従来型のキャンパスとなってしまうとし、次の2点に配置計画上の力点をおいたとあった。

- ・周囲の平坦な環境（田んぼ）との関係上、低層とする。
- ・看護、福祉、医療という共に関連しあう学科から構成される総合大学という性格上、各学科を孤立させることなく密接に関係づけること。



雨のなかの見学会

建物の全体図

実際に見学してみると、敷地環境上低く押さえる理由はあまり無いように思えたし、全体のボリューム感が特段に押さえられている感じもなかった。しかし、各学科をひとまとまりに捉え、共通施設を中庭ゾーンに収めるという手法は機能的でわかりやすく、うまくこの施設の特徴を表現していると思った（増設などへの対応に興味あるが…）。

各建物についてはそれぞれが同様のコトバを使いながらもこの手の建物にありがちな画一的で冷たい印象はなく、あっさりしつつも良く吟味されたディテールで溢れており、設計者のそれに対する引出しの多さに感心した（トラスの構造の選定は別として…）。

あいにくの空模様で、見学は雨に濡れない1階レベルでの移動が多かったせいもあるが、あれだけ2階レベルに緑がありながら、1階で緑がほとんど感じられないことが残念だった。きっと設計者は、「日差しの降り注ぐ緑の中の大学」というイメージで設計したと思われ、その意味からもぜひもう一度確認に訪れたいと思う。

田代：広い田んぼの中にあるキャンパスは、4階の低層とはいえ、やはり大きく感じた。天気が悪く見学が屋内中心となってしまったのが残念。屋上庭園のある2階レベルや外での移動をもっとしてみたかった。屋上庭園にあいている穴は、迷路のような空間にいるようで楽しい気分になった。学生の集いの空間がいたるところにあり、他の学科の学生ともコミュニケーションをとりやすくとってもよいと感じた。

埼玉県立大学・同短期大学部の概要

新設の4年制大学に短期大学部を併設する。大学は看護、リハビリを主とする理学療法、作業療法、ソーシャルワーカーを育てる社会福祉の4学科からなる保健医療福祉学部をもつ。それぞれの定員は80、20、20、40人。短大は第1～2看護、衛生技研、歯科衛生、保育の各学科（定員計220人）。地域看護学と助産学の2つの専攻（定員計60人）からなる。

■特別企画 ユニバーサルデザインを考える

当ニュースレターの「ちょっとひと言」コーナーで、「ユニバーサルデザインを考える」を掲載し始めたのは、「バリアフリー」から「ユニバーサルデザイン」へとといった議論が一般化し始めたころでした。実体の見えにくい議論は落ち着きが悪いもので

「住みこなしの設計」を考える

林屋雅江

バリアフリー住宅を設計する機会が増えている。40～50代の建築主は、将来、老親の介護があるかもしれないと居間に隣に接して和室を設け、自分自身の老後を見通して、新築時やリフォーム時にある程度の先行設備を希望する。それらの内容は主に、移動系と道具系に大別されている。床段差をなくし手摺りの下地板を壁内各所にとりつけ、車椅子対応のスペース配分と寸法の設定、扱いやすい道具の選択がある。

そこへ近年、ユニバーサルデザインということばが飛び交うようになった（もとはといえば アメリカの建築家ロナルド・メイス氏が1975年頃から提唱している）。さっそくユニバーサルデザインの概念を調べていくと、私の生活範囲内でほんのすこし気になっていたことが取り上げられ、拡大投影され明文化されて7つのキーワードとして整理されている。私は数年前の病気入院の体験から弱い立場の病人や高齢者を、私自身の姿と一致出来るようになったようだ（これは病気をして得た最大の収穫であるが）。まさにユニバーサルデザインは私の問題であるという親近感を感じる。ビデオデッキの字が読みにくい、多機能携帯電話を使いこなせない、コンタクトレンズを外して入浴すると給湯器のリモコンの数字が見えないetc…そんな私がいる。

住宅の設計では、先の移動系、道具系に加えて私は、管理系と言うことを念頭に打ち合わせを進めている。ユニバーサルデザイン・住宅の「住みこなしの設計」とでも呼ぼうか。入居後の建物のメンテナンス、快適さへの生活管理、家事管理を、楽しく、誰でも、いつまでも自分で出来るということ、さらに高齢者や障害者を介護する人にとっても同様のことを検討していく必要がある。

現在は健康な夫婦と子ども2人という標準的家族の20～30年後は、高齢者対応住宅どころか「老々介護」や「高齢者の独居」という現実がやってくるであろう。



「住みこなしの設計」を重視するようになったいくつかの住み手のことばを結びにしたい。「天井までの大きな窓は好評だったけれど、ガラス拭きが出来なくなった」「洗面器の前の化粧鏡は大き過ぎて拭けなくなった。

顔が写る程度の小さいものに替えて下さい。姿見は居間につけます」「義母の入浴介助の時しがみつかれるので、私の掴まる手摺りが必要になった」「浴室入口床面の細長い排水ピットの掃除が出来ない」そして私「・・・」。

す。そこで、ユニバーサルデザインについて、皆さんはどのような感覚や意見をもっているのか、会員に一言いただこうとして始めたコーナーの今回は特別企画です。今後も皆さんの投稿を期待します。

ユニバーサルデザインの複眼的『私』考

板東みさ子

「この頃指先が効かなくなっちゃって。ネックレス止めてくれない?」「針孔に糸通してね」初老を迎えた母の頼みは、日常の会話の中にさり気なく折り込まれていた。加齢とはそんなものかと意識もせず聞いていた私も、気づいてみればその頃の母の年齢に近づいている。

細いチェーンの先に付いた小さな輪、そこにある更に小さな突起を押さえ、首の後ろに廻した途端に指から外れ…。ムム…。急いでいる時に限ってなかなかはまらない。母の昔の声が蘇る。ああ、こういう感じだったんだな、と実感する。

それにしてもその小さな輪は、細かい神経が必要な割には、アクセサリとしての黒子の使命を全うしていないのだ。後ろ手に嵌めて安心していると、ペンダントヘッドの脇にいつのまにかしゃしゃり出ている。様々なチェーンに使える掛金として出回り大量生産できる価値があるのだろうが、もっと誰もが嵌め易いもの、あるいはそれ自身が、ヘッドとしてのデザインを持っているものであってほしいと近頃特に思うのだ。

便利さ、手軽さ、効率の良さ、快適さ、楽しさ。日々の生活の中で、求める人には誰にでも等しく手に入れられるべきだろう。その為に、各々が必要とする事を把握し声に出して行かなければと思う。他方、その為に失われがちなることを忘れないようにしたいと思う。



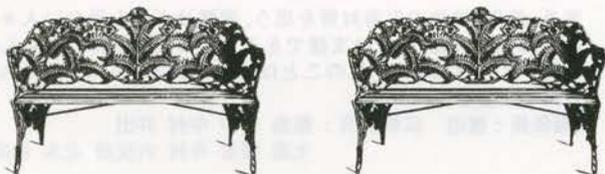
30才を過ぎて独りで和服を着られるようになった私は、背中に廻した手で帯を形よく締めるのに四苦八苦。冬でも汗ばみ、日本人として少し情けない。その度に、毎日こともなげにやっていた昔の人は、筋肉や神経がもっと後側に発達していたんだろうと感じ入る。いざとなれば20分で起きて身繕いも済ませ飛び出せる現代の簡便な日常はありがたいのではあるが、それに甘んじ身体が退化してしまったんじゃないかとも思う。動かないで済むようにしておいて、殊更に運動不足を補う体操やストレッチをしたりしているのも妙と言え妙だ。

手間暇かけることの中に、美しさや輝きが在ることも確かなことだ。工芸品や職人芸や生活の技、術、それらを伝統の遺産としてではなく、日常の中で育んでいける気持ちの余裕と機会を持たなくてはいけないと思う。みんなの便利を目指すと同時に、みんなで多少の不便も楽しむという視座もユニバーサルデザインには必要だと思うのだが。

表参道は歩道の幅も広く、ケヤキもゆったりして東京のまちの中では良いほうだ。だけれども、あの一直線の歩道にベンチはない。植え込みの柵がベンチがわりに設計されているらしいが散歩の途中で一休みするには、ほっとしない。すぐお尻がいたくなる。子ども連れや年配の人にはやさしくない。無神経に捨てられていくゴミ。商店街の方々が自社ビルの前を、車道際まで掃除するようになって多少改善された。それでも植え込みの中にペットボトルや缶がおきざりにされる。ゴミの日には、からすのえさ漁りで悲惨な状態となる参道。異臭を放つゴミ。人間の知力を試めされる風景だ。ガラス張りの銀行に立ち寄るとき、いつも歩道とビルの境界の段差でこけそうになる。やや傾斜する歩道と敷地の取り付けは特にあぶない。自転車が置き去りにされた植え込みがすっかり退行している。乳母車と小さな子どもと母が通り過ぎる。自転車の泥除けに子どもの顔がぶつかりそうになる。なんとオートバイまでが歩道に放置されている。向こうから顔見知りの老夫妻がくる。妻を10年の余介護してきた夫はすでに70歳を超えたと言う。妻の車椅子での散歩が日課だ。青山墓地中通りから絵画館前の銀杏並木の通りは比較的快適なコースだという。

急ぎ足で地下鉄に。最近は無意識に手すりのある側を使う自分に気がつく。前を右手に杖をもつ男が左手を手すりに託し、ゆっくり、しかし必死に降りていく。エスカレーターは登りのみ。その上、途中で階段の部分がある。乳母車の女性は手荷物もあり立ち往生している。ちょっと手助け。向こうからカンガルー式の抱き袋に赤ちゃんをいれ、背中にリックの若い母がエスカレーターであがってくる。若い男性がその横を駆け上がる。若い母は一瞬緊張して子どもを腕でかばう。地下鉄に乗る。車椅子の若い男をサポートした同世代の4人のグループが乗り込んでくる。車椅子であることを気にする風もなく自然体で、シャツがかっこいいなどと冷やかしかついている。彼の車椅子は後ろの車輪が大きく、前の車輪が小さいタイプ。乗り心地をたずねる。「操作はしやすいが地下鉄ホームと車両の段差は若い僕でも自力ではわりだ！」とはにかむ。新宿副都心の地下道を進む。段降機が証拠品のように在る。公衆電話が高い位置と低い位置に二つ並んでいるがやや照明が暗い。庁舎にたどり着く。お手洗いに駆け込む。手前に男性用のトイレ、奥に女性用のトイレ。出てきた男性とぶつかりそうになる。際限もなく続くバリアフル！

私の考えるユニバーサルデザインは年齢区別や性差をこえる共生のデザイン感覚で都市や住まいが創られること。気張ることなく持続可能な自然体でやさしいこと。そして、美しい景観をそなえること。



ユニバーサルデザイン (UD) が昨今非常に話題となっている。障害を持っている人を対象とした各種の法案を経過した後、1990年にADA法が制定され、それを更に一般の健常者の万人にも広く行き渡らせようとするものがUDと言う考え方であろう。

日本においても半世紀前、千葉大学の小原二郎教授の「人間工学」と言う考え方で、座り易く、疲れにくい椅子のデータ分析により、学童用の椅子のJIS改正から新幹線の椅子までが変わってきた実績がある。

ロナルド・メイス氏の主張する論旨を読むと全てもっともなことばかりだと思う。別な言葉を用いれば、「当たり前」な事だと思う。「今更事立てて言わねばならない」と言う点が、逆に世の中がおかしくなっている状況を表しているとも言える。デザインを職業としている者にとっては、建築家としても、不文律として潜在的にUDの考え方は持っている筈である。

私は永年、新築と改修の両方を手掛けてきた。中でも民家の改修は特別な思いを込めて力を注いできた。100年、200年も前に建てられた古い民家を改修することによって、更に100年は充分耐えられる家にする事が出来るのである。民家は時代を経てきて、各時代が受け継いできた大切な文化である。この十数年の間に私達の生活の仕方はとても大きく変化してきている。そのために古い住まいは、急速に不便さを感じるようになってきた。確かに民家はいつも薄暗い、冬は寒い、部屋数は多いのに使い切っていない、設備が古くて使いにくい等と言ったことが多々ある。しかし、ここで安易に壊してしまっはいけないのである。

今まで受け継いできた先人達が毎日慈しんできた黒光りする大黒柱や大きな梁、格子戸、そして家の佇まいなどにことのほか愛着心があるのではないだろうか。不便な点や不満な部分を改修によって今の生活に合った快適さや住み易い家にする事をプラスしていけば、素晴らしい豊かな住まいに生まれ変わるわけである。

家族の方達の生活が便利になるよう工夫すれば、永い歴史をもった愛着のある建物を簡単に取り壊さずすむ訳である。受け継げる物は受け継いで、その時代の息吹を加えて尚一層の輝きを次の世代に伝えることが出来るのである。

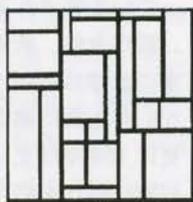
UDの7原則と言うのがある。民家の改修から分析して見よう。

- ① 公平な実用性
高齢者を含め万人に愛される空間作り。
- ② 柔軟性
人が成長するように、空間も成長する。時代に合ったように改修する。
- ③ 簡単でカンだけで使える
永年住んでいた処を更に便利にする。
- ④ 感覚でわかる情報

〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-6-5
麹町E・C・Kビル 階生活構造研究所内
TEL 03-5275-7861 FAX 03-5275-7866
メールアドレス uifa@LIQI.CO.JP

永年慣れ親しんできた処を更に便利にする。

- ⑤ エラー対応
少しでも段差を少なくする。逆に明瞭な段差を作る。
- ⑥ 労力が少なくてすむ
間取りの変更などで動線を短くする。
- ⑦ 利用し易い大きさや空間
元々持っているゆとりのある空間を更に便利にする。
この様に見て行くと、まさに民家の改修はUDそのものであると言える。更に彼が主張している言葉―「UDは単にモノを作る技法ではなく、社会を作り直す技法である。障害をもつ人専用の設備はつからない。また、UDとは特殊なデザインや特殊な販売方法をとるのではなく、一般的なマーケットで解決するデザイン手法である」は、我々建築設計を業としている者が常々考えている事と全く一致するのである。



■ド・ラ・トゥールさんを訪ねて



2000年4月3日、ド・ラ・トゥール UIFA 会長のステュディオにて撮影。1週間前から風邪をひいているといいながら、それも構わずに電話や来客の対応などに忙しく動き回る。この日も、次回大会の開催地について代理店とやりとり。彼女の陽気な声が響きわたるなか、飼っているハトたちが自由に室内を飛び回る…。(土田 環・学生)

■役員会報告



役員の方々

2000年 第4回 7月18日(月)

- 出席者：小川 樹川 草野 栗山 正宗 峯 柳沢 山田 渡辺 吉田 (よ)
- 議事：・「この指とまれ」(7月4日埼玉県立大学・同短大等の見学会)の報告と総括。参加者は17名。
・事業委員会より、新顔顔合わせ会(7月11日)の報告。
・「この指とまれ」については当面は広報に予算があるのでそれでやっていく。「可能ならば来年はラベンダーの季節の北海道では？」という案も出された。
・広報委員会からは印刷部数の提案が資料と共にだされ、検討された。43号の内容案、バックナンバー総集編作成、情報をホームページで流す案等が出された。
・海外交流の会(8月26日)「トルコ大地震から1年…」のチラシの案。
・会員区分の多様化については他の会の資料が出されたが、もう少し検討が必要。

2000年 第5回 8月18日(金)

- 出席者：樹川 草野 栗山 正宗 峯 渡辺
- 議事：・海外交流の会の申し込みは8月18日現在11名。当日の役割分担を決定。次の案として11月18日、川西美美氏(ドイツ児童文学者―幼稚園に図書室を作る運動とM・エンデの翻訳など)が出された。
・会員区分の多様化の検討については、総務担当のもとにワーキングを設置する案がだされ、了承された。会則の見直しを含め、来年2月までに結論をまとめる予定。(峯 成子)

■広報日より

ナミタ・シンさんの便りがやっと届きました。吉村行雄講師の写真の美しさは ぜひご本人の写真集を見て！ 田中さんのモンゴル紀行のゲルの組み立ては災害時に十分役立ちそうです。海外交流の会NO21、松川さんの「トルコ大地震から1年」の講演を聞きながら、三

宅島・新島・神津の災害対策を思う。避難せざるを得ない人々の心労は世界共通。住宅は支援できる見通しだが日常の暮らしや心労へのケアなど、不足のことは山ほどあるでしょう。それぞれにご支援を！

(編集長：渡辺 広報担当：飯島 田中 中村 井出
大高 須永 今村 六反田 北本 柏原)